

私たちはこんな授業を目指しています

目指す教室

1 誰もが学びに参加できる教室

全ての子どもを参加させることは、授業においては当然のことのように思われます。しかし、実際には、発言する子が一部に限定されていたり、自分を表現することなくひたすらノートを書く子がいたり、さらには考えることをあきらめ、学ぶことから気持ちが離れてしまっていたりする子が見られます。

学力の高い子にも低い子にも、意欲の高い子にも低い子にも、全ての子どもに等しく学ぶ権利を保障する授業をつくり出すことは、日々子どもと真剣に向き合う教師にとって、いつも頭を悩ませる問題であり、授業づくりの壁となっています。しかし、公教育に携わる者の責務として、全ての子どもの参加を目指す取り組みを、私たちはあきらめるわけにはいきません。そこで、私たちは、研究の第一目的を、「誰もが学びに参加できる教室づくり」と設定しています。

2 誰もがより質の高い学びに挑戦できる教室

授業には様々な学習の場面があります。一問一答による教師との子どものやりとりの中で、基礎基本を確認していくような場面もあります。また、ドリル的な作業によって、基礎基本の定着と習熟を図るような場面もあります。しかし、こうしたことの繰り返しだけでは、子どもは学ぶことの本当の喜びや意味に気付くことはありません。学ぶことの喜びは、分かっていることの確認からではなく、分からないことが分かるようになっていく過程で生まれるものです。

そこで、私たちは子どもの分からなさや考えの差異から出発し、それを仲間とともに追究していく授業をつくり出すことに努めています。分からなさや考えの差異を突き詰めていく営みは、学習内容の本質にかかわることである場合が多くあります。また、意図的に質の高い課題を提示し、仲間と考え合うことで解決していくような授業にも取り組んでいます。こうしたことに子どもが挑戦できるような授業を目指すことで、学びの質が高まっていくと考えています。

私たちは、研究目的の第二項目を、「誰もがより質の高い学びに挑戦できる教室づくり」と設定しています。もちろん、この挑戦は学力の高い子のためだけにあるのではなく、全ての子に挑戦する機会を与えていくことを目指しています。

3 他者とつながることの喜びを分かち合う教室

人に反対されるとすぐにキレる子。自分の考えを表現できない子。一方的に自分の考えを述べるだけで相手の言葉に耳を傾けない子…。日常生活に限らず、授業の様々な場面においても、他者との関係をうまく築けないでいる子が多く見られます。学ぶことにおいて大切なのは、相手の言葉を聴く謙虚さであると言われます。仲間の声に耳を傾け、考えを受け止め、それを自分の考えとすり合わせながら進んでいく営みがあってこそ、学びは豊かさや深さをもったものになっていきます。また、その過程で、仲間から学ぶことの意味、仲間と協力して学ぶことの価値を感じることが出来ます。さらには、人とつながることの心地よさを体感でき、よりよい人間関係の形成にも役立ちます。

私たちは、研究目的の第三項目として、「他者とつながることの喜びを分かち合う教室づくり」を掲げています。そして、この第三項目は、第一項目と第二項目実現への努力の結果として達成されるものであると言えます。ただ、人間関係づくりは学級づくり、授業づくりの基本であり、よりよい関係の構築が目指す教室の実現にとって大切な要件であるとも言えます。

学び合う教室

1 学び合いの目的

全ての子どもを学びに参加させ、仲間との対話の中でより質の高い課題に挑戦させ、そして助け合うことで人とつながることの意味に気付かせていくという研究目的を、私たちは学び合いの授業によって実現しようと考えています。

では、なぜ学び合いが必要なのでしょうか。

教室には40人近い子どもたちがいます。その一人一人と教師が意識をつなぎ、それを45分間継続していくことは不可能です。教師とのつながりが切れたところから子どもは脱落していきます。そこで、教師一人では維持しきれないつながりを、仲間の力で補うことが必要になります。少人数グループや隣同士のつながりによって、授業への参加状態を確保しようとするのが一つのねらいです。

もう一つは、質の高い学びへの挑戦は、一人の力ではできません。一人の力ではできないけれども、誰かと力を合わせることで越えていけるようなところにこそ、質の高い学びが生まれると考えています。個人の追究の限界を仲間との協力で突破していこうというのが二つ目のねらいです。

そして三つ目のねらいは、自分が他者とつながることの喜びへの気付きを促すことです。

2 学び合いの形（ペアトーク・グループトーク・クラストーク）

私たちは、3つの形の学び合いを考えています。隣同士の対話を基本にした学び合いをペアトーク、男女混合4人グループでの対話を基本にした学び合いをグループトーク、そして、学級全体で話し合いながら一つの問題を追究していく学び合いをクラストークと名付けています。ペアトークは主に低学年で、グループトークは主に中学年と高学年で行っています。また、クラストークはどの学年でもできるようにしたいと考えています。

これら3つの学び合いを、次のような場面で取り入れるようにしています。

- (1) 考えたことや気付いたこと、調べたことなどを出し合い、仲間と情報を共有する場面
- (2) 個人作業など、少しの手助けがあればどの子もスムーズに学習が進められる場面
- (3) 分からない問題を、仲間とともに考え合うことで突破していく場面

私たちは、学習の内容、学習の場面、子どもの状態を確かめながら、ペアトーク、グループトーク、クラストークを効果的に授業に組み入れていこうと努めています。

3 ひとり学びと学び合い

私たちは、授業の展開をおおまかに、「ひとり学び」と「学び合い」に分けて考えています。子どもの側に何も情報がない状態や、考えをもっていない状態で学び合いをしようとしても、そこで交わされる言葉は浅いレベルのものでしかありません。そこで、学び合いの前段階としてひとり学びを設定します。この段階において、まず個人で学習する対象（テキストや資料、問題文など）と向き合い、情報を蓄えたり、自分なりの考えをもったり、多様な言葉に出会ったりします。ここでの個々の思考活動が充実しているほど、後の学び合いの質が高まってくるはずですが、もちろん、子どもの状態に応じて、

また、「ひとり学び」と「学び合い」という二段階にすることで、授業の構造が単純化され、子どもがじっくりと腰を据えて問題に取り組むことができるようになると考えています。私たちは、教師が教えることに追われる授業から、子どもが学ぶ時間をしっかりと確保する授業への転換を図ろうと考えています。